



栃木県発祥の地

The Origin of Tochigi

栃木市

# 歴史探訪

## 栃木県庁の名残をたどる

令和5年は、ほぼ現在の栃木県の県域が定まってから150年の節目の年です。栃木県という名称でありながら、県庁所在地が栃木市ではないことを不思議に思う方もいるかもしれませんが、実は、栃木県の最初の県庁は、栃木県栃木町（現在の栃木市）にあったのです。ここでは、栃木県の県庁が栃木から宇都宮に移っていった歴史と今について触れていきます。

### 栃木県庁の歴史

現在、栃木県の県庁所在地は、宇都宮市だが、栃木県が誕生した明治6年（1873年）から、宇都宮町（現在の宇都宮市）に県庁が移転した明治17年（1884年）までの間は、栃木町に県庁が置かれていた。栃木県という名称は、明治4年（1871年）廃藩置県により栃木県の基となる下野国が、「栃木県」と「宇都宮県」に整理されたことに発する。この時、栃木県の管轄は足利郡、梁田郡、寒川郡、安蘇郡、都賀郡のほか、上野国の邑楽郡、新田郡、山田郡まで広がっていた。明治6年（1873年）、「宇都宮県」が「栃木県」に統合され、ほぼ現在の栃木県の県域が定まった。その後、上野国の3つの郡は、明治9年（1876年）に群馬県に統合された。



栃木市観光ボランティア協会 清田会長

### 県庁跡地を歩く

栃木市観光ボランティア協会の清田照子会長の案内で、かつて栃木県庁があった場所辺りを散策すると、そこで栃木県の起源を見ることができた。

栃木市役所の西側にある県庁堀の前で、清田会長と待ち合わせし、そのまま堀に沿って歩き始めると、堀の中の鯉たちが近寄ってくる。「足音がすると、餌がもらえる」と思って近づいてくるのよ。かわいいでしょ」と清田会長。

東西約246メートル、南北約315メートルの方形にめぐらされた県庁堀の内側が、栃木県庁の敷地で、県庁堀は150年前の姿をそのまま残す。当時は県庁舎以外に、県令や参事、官吏（役人）の住居があったと言われている。市内中心を流れる巴波川と県庁堀の間には、県庁に直接舟が着くように造られた長さ120メートルの堀（漕渠）も、現存している。

「県庁が宇都宮に移転したことを残念がる話が多いけど、私はポジティブだから、県庁が宇都宮に移ったからこそ、今の蔵の

### 栃木県発祥150年 栃木市歴史年表

- 明治4年（1871年）  
廃藩置県により栃木県が設置される
- 明治6年（1873年）  
栃木県と宇都宮県が合併し、栃木町に県庁が置かれる
- 明治17年（1884年）  
県庁が宇都宮に移転する
- 明治39年（1906年）  
谷中村を藤岡町に編入する
- 昭和12年（1937年）  
栃木町が市政を施行し、栃木市となる
- 昭和29年（1954年）  
大宮村、皆川村、吹上村、寺尾村を栃木市に編入する
- 昭和30年（1955年）  
藤岡町、赤麻村、三鴨村、部屋村が合併し、藤岡町（新）となる  
家中村、赤津村が合併し、都賀村となる



旧栃木県庁の敷地図

街が残っていると知っているの」  
 確かに、県庁がそのまま残っていたならば、近代化により、県庁堀や蔵が取り壊されてしまったかもしれない。県庁移転については様々な説があり、宇都宮に県庁が移転したことで、発展が遅れたと残念に思う市民もいるようだが、清田会長のように前向きに解釈して、それを観光案内に活かしていく姿勢は、とても粹に映った。

### 移転後に残ったもの

県庁移転後の敷地には、明治29年（1896年）に県立栃木高等学校の前身となる

栃木県尋常中学校栃木分校が開校し、明治43年（1910年）に建てられた講堂は、今でも生徒に大切に使われている。大正10年（1921年）には栃木町役場が建てられ、現在は栃木市立文学館として活用されている。県庁堀は、毎年、栃木高校の生徒の手により除草作業が行われている。昭和の高度経済成長を経て、多くの古い建物が建て替えられてきた中、歴史的なものが市民に守られて残っていることは、地域の宝と言える。

清田会長は今までの人生のほぼ半分を、観光ボランティアとして過ごしている。自身が旅行に行った際に、地元の人

ドバイスで思い出に残る良い旅行ができたことをきっかけに、せっかく栃木市を訪れた観光客に、楽しい思い出を残してもらいたいとの思いで観光ボランティアを始めたと言う。  
 日々の観光客との一期一会の出会いが一番の魅力であり、観光案内をきっかけに、10数年後に再会したり、毎年連絡を取り合うようになった人とも出会えたと言う。「誰でも旅行に行ったら良い思い出を作りたいでしょ。だからそのお手伝いをさせてもらっているの」と笑いながら語る。  
 こんな素敵な人に観光案内してもらえるとこののも、栃木県発祥の地、栃木市の魅力の一つではないだろうか。



県庁堀を除草する栃木高校の生徒

西方村、真名子村が合併し、西方村となる

**昭和31年**（1956年）

富山村、瑞穂村、水代村が合併し、大平村となる

岩舟村、小野寺村、静和村が合併し、岩舟村（新）となる

**昭和32年**（1957年）

国府村を栃木市に編入する

**昭和36年**（1961年）

大平村が町政を施行し、大平町となる

**昭和37年**（1962年）

岩舟村が町政を施行し、岩舟町となる

**昭和38年**（1963年）

都賀村が町政を施行し、都賀町となる

**平成6年**（1994年）

西方村が町政を施行し、西方町となる

**平成22年**（2010年）

栃木市、大平町、藤岡町、都賀町が合併し、栃木市（新）となる

**平成23年**（2011年）

西方町を編入する

**平成26年**（2014年）

岩舟町を編入する

# 栃木県発祥の地

〜 栃木市を語る 〜

栃木県発祥の地の知られざる歴史



神明宮 #001

## 「栃木のお伊勢さま」と「栃」の字の秘密

「神明宮は「栃木のお伊勢さま」として市民から愛されていますが、いつ頃に建てられたものなのでしょうか？」

神明宮は室町時代に創建され、当時は神田町にあったと言われています。その後、皆川広照が栃木城を建てたことに合わせて、安土桃山時代に今の場所に遷ったと言われています。

今の拝殿は明治8年に建てられ、本殿は明治16年に建てられたものです。栃木町に県庁が置かれたことで神明宮は県社となり、境内に栃木県中教院（神職や僧侶の道場）の講堂が設置されました。その後、中教院が廃止されて神明宮に寄進されたことで、現在の拝殿になっています。そして、それを機に、本殿を伊勢神宮の内宮に習った神明造りという建築様式で新築したと言われています。

現在の神明宮は栃木県の歴史とともにあると言えますね。

「本殿といえば、屋根の「千木」が10本に見えたことから「十の千木」つまり「十千木」が栃木の由来になったという説がありますが、どう思いますか？」

先ほどの話の様に、今の本殿が建てられたのは県庁が移転した後ですし、それ以前はおそらく別のものだと思いますので、千木が10本あったという説は言い伝えだと思っています。

ですが、旧栃木市の市章に千木が使われていたように、市民にとっては神明宮の千木は特別なものなんだと思います。栃木の「栃」の字のつくりの「万」が「千が十集まると万になる」という話も浪漫がありますよね。

「それだけ、栃木市民にとっては神明宮は特別な場所なんじゃないかな。」

神明宮は栃木県庁がなければ今の形にはならなかったし、県庁が移転しなかったとしても今の形で残っていることはなかったでしょう。良いことも、悪いことも、そういった過去の積み重ねにより、「栃木のお伊勢さま」として栃木市民から愛される神明宮があるのだと思います。



神明宮宮司  
神山拓之氏

## 神明宮

栃木市旭町26・3  
☎0282・24・4530

栃木市の中心部に位置し、天照皇大神を祀る神社です。室町時代中期に伊勢神宮から分霊を受け創建されたといわれています。安土桃山時代に皆川広照の栃木城築城にもなっており、現在地に移され、栃木町の成立にかかわったといわれており、本殿は古式を守った本格的な神明造りの神社建築であり、建築当初の姿を現在もとめています。





# 巴波川

# 002

## 「母なる川」、巴波川

栃木県庁が栃木町に置かれた理由の一つに、巴波川での舟運が関係しているという説がありますが、舟運はどのように行われていたのですか？

栃木市の中心部を流れる巴波川は、母なる川と言われている。栃木町の発展にとって巴波川の舟運はなくてはならないものでした。

江戸時代に、栃木の商人は舟を使って江戸との交易を行い、多くの財をなしました。当時は船で江戸まで下ることができ、明治時代にはまだ、鉄道もあまり発達していなかったこともあり、舟運は主要な交易の手段でした。

巴波川から県庁堀まで水路がつながっていて、当時は県庁まで直接舟が行き来していた歴史があります。そういったことから、栃木県庁と舟運に深い関係があるのがわかりますよね。

このように、栃木市の歴史にとって舟運は大きな意味を持っていて、蔵の街遊覧船では、その様子を現代に再現しています。

**今や蔵の街遊覧船は、栃木市の代名詞の一つですからね。蔵の街遊覧船はどうやって始まったのですか？**

もともとはうずま川遊会という団体が、巴波川に舟を浮かべてイベントをやっていたのが始まりなんです。それを見て舟にのりたいという観光客が現れ始めたので、有料で観光客を乗せてまちおこしをしようと始まったのが蔵の街遊覧船です。

舟から景色を楽しむだけでなく、舟運の話はもちろん、栃木市の歴史、江戸文化や巴波川の環境についてなど様々なことを観光客に伝えています。

**ただ遊覧船を楽しんでもらうだけではなく、遊覧船を通して栃木市の魅力を発信してくれているんですね。**

市民の力によって古い街並みや歴史が今現在も残っている、そんな栃木市が大好きなんです。だからこの栃木市をこれからも残していけるように、皆でがんばっているの、遊覧船に遊びに来た観光客に、その思いが少しでも伝わればと思っています。

## 蔵の街遊覧船

栃木市倭町2・6

(乗船場所・待合所)

☎0282・23・20003

舟運により、江戸から物資のみならず多くの文化が流入し、小江戸と呼ばれている栃木市。

その当時の舟運を再現する蔵の街遊覧船では、街中を流れる巴波川の川面から、情緒ある蔵の街並みを楽しむことができます。船上では、粋な船頭が巧みな竿さばきで「栃木河岸船頭唄」と共に栃木市や巴波川の歴史を案内してくれます。



蔵の街遊覧船マネージャー

中村明雄氏

# 江戸型人形山車

#003



## 栃木県庁に「秋まつり」の歴史あり

秋祭りの起源は、栃木県庁にあると聞いたのですが本当ですか？

明治7年の神武祭に、静御前の山車と諫鼓鳥かんこりがお祝として出たのが秋まつりの起源とされています。神武祭は、古事記に出てくる初代天皇である神武天皇のお祭りです。県庁が設置されてから始まったとされています。

そんなに昔から山車はあったんですね。その時の静御前や諫鼓鳥の山車は今と同じ物なんですか？

静御前の山車は江戸時代に作られたもので、神武祭に合わせて江戸から買い付けられたと言われています。諫鼓鳥は、宇都宮から買い付けられたのですが、当時は今のものより小さかったと言われていて、現在の諫鼓鳥はそれを基にして大きく作り直したものだそうです。

その後さらに山車が増えて、昭和12年の栃木市政施行を記念した祭以降は、山車まつりとして開催されるようになり、それが今とはちぎ秋まつりとなっています。

秋まつりにそんな歴史があったんですね。

明治維新により、江戸で行われていた山王祭が廃れ、多くの江戸の山車が売りに出されました。栃木は舟運により、江戸の文化が多く流入していたことから、その山車を栃木で活かそうという機運があったところに、栃木町に県庁が置かれたことが後押しとなり、一気に機運が醸成されたんです。それなので、秋まつりは町内のプライド、自分たちの富の象徴として始まっているんです。そんな歴史があって、今の秋まつりがあるんですが、今は後継者不足でどの町内も山車を維持することが難しくなっています。

これからは若者に地域の伝統文化に親しんでもらって、栃木市のプライドとして、秋まつりを続けられるようにすることが課題ですね。



## とちぎ山車会館

栃木市万町3・23

☎0282・25・3100

現在、2年に一度開催される「とちぎ秋まつり」では、江戸末期から明治時代にかけて作られた見事な彫刻と刺繍がほどこしてある江戸型人形山車と、一對の獅子頭が蔵の街大通りに姿を見せます。この「とちぎ秋まつり」の興奮をいつでも楽しめるようにと、3台の山車を常時展示し、デジタル技術を駆使した映像と光の演出で「とちぎ秋まつり」を再現しています。会館の2階は山車の資料に関する展示室になっています。



とちぎの山車祭り伝承会会長  
佐山正樹氏

# 県庁の 記憶

#004



旧栃木県庁舎（片岡写真館蔵）

## 写真の中に残る栃木の歴史

**片岡写真館は明治初期に創業したと伺っていますが、どのような歴史があるんですか？**

片岡写真館は明治2年に日光で創業しました。初代の片岡如松かたおかじしゅうは、初代栃木県令の鍋島貞幹なべしまていかんに誘われて、栃木市の今の場所に移り住んだと言われています。

片岡如松は鍋島貞幹と仲が良かったということで、撮影の練習も兼ねて県庁や学校など公的機関の写真を多く撮影していたようです。当時の撮影技術の関係で動くものが撮影しにくかったという理由もあるんでしょうけどね。

**なるほど、そういう歴史があるからこそ、片岡如松氏が撮影した県庁や県庁堀の写真が今でも残っているんですね。**

県庁や県庁堀の写真以外にも、巴波川や神明宮、太平山神社などの建物や、巴波川での生活の様子や蔵の街大通りの往來の様子など、歴史的に価値のある色々な写真が残っています。

明治初期に写真館を開業してから、150年以上同じ場所で開催し、戦時下の空襲の被害を免れることができたので、今でも多くの写真が残っているんです。

自分が5代目になるのですが、先祖代々栃木市のまちの風景を撮ってきたので、場所は同じでも時代ごとに違う景色を見ることが出来ます。蔵の街大通りや太平山は、当時と同じ場所から写真を撮ることが出来るので、実際に、明治時代の写真と同じ構図で撮影して、今と昔の景色を見比べるようなこともしているんですよ。

**その時々々の写真が当時の歴史を一番伝えるものになっているんですね。**

水害の時の写真も残っているんですが、当時は、写真を撮ることが出来る人も限られている時代なので、自分しかその時の状況を写真に残せないという信念で写真を撮っていたのだと思います。自分も二度の水害の時は、必死に動画で記録を残していたんですが、時代と方法は変わっても、その時の思いはご先祖様と一緒にですね。

## 栃木市立文学館

栃木市入舟町7-31

☎0282-255400

栃木県内初の公立文学館。市ゆかりの作家である山本有三、吉屋信子、柴田十ヨを中心に、文学に関する展示や市史に足跡を遺した先人たちの紹介、旧栃木町役場庁舎に関する展示を行っています。

文学館の建物は、大正10年に栃木県庁跡地の一面に栃木町役場庁舎として建てられ、平成26年まで約90年間にわたり町役場・市役所として使用されてきました。



片岡写真館代表  
片岡幸夫氏

# 栃木市回顧 ～明治時代を振り返る～

栃木県が誕生した明治時代に、現在の栃木市がどのような様子だったのか振り返ってみましょう。市内には、栃木県が誕生した明治6年に創立し、今年150年を迎える小学校が10校あります。

## 【都賀地域】

都賀地域では農業が主要産業で、米、麦と並んで麻が生産されていた。栃木県産の麻は野州麻と呼ばれ、明治時代に最盛期を迎えた。

## 【岩舟地域】

岩船山の岩舟石の採掘は明治期に最盛期を迎え、鉄道工事や神社の石垣、石段等によく利用されていた。栃木町に建てられた県庁にも多くの岩舟石が使用されていた。

## 【藤岡地域】

渡良瀬川の氾濫や足尾鉾毒事件により、群馬県との境の辺りを流れていた渡良瀬川の改修が行われ、谷中村が廃村になった。

## 【西方地域】

西方村では江戸時代に造られた小倉堰からの豊かな水を利用した稲作が盛んで、「西方五千石」と言われるほどの米どころだった。

## 【栃木地域】

明治の栃木町は県内商業の中心であり、宇都宮町に次ぐ商都だった。明治26年には県内初、関東では東京、横浜に次いで3番目に商工会議所が設立された。

## 【大平地域】

大平地域の特産品であるぶどうの栽培の歴史は古く、明治末期に富山村（大平西地区）で始まったと言われている。

明治5年に近代的学校制度である「学制」が出されたことを受けて、●の小学校が明治6年に創立され、今年150年を迎えます。その後、各地域に多くの小学校が創立しました。

● 真名子小学校

● 西方小学校

● 家中小学校

● 合戦場小学校

● 吹上小学校

● 国府北小学校

● 千塚小学校

● 大宮北小学校

● 部屋小学校

● 藤岡小学校

令和5年6月10日発行

発行：栃木市広報課

〒328-8686 栃木市万町 9-25

TEL 0282-21-2172

協力：栃木市観光ボランティア協会

神明宮

蔵の街遊覧船

とちぎの山車祭り伝承会

片岡写真館

(順不同)

The Origin of Tochigi

栃木県誕生150年

栃木県発祥の地

# 栃木市



©2014 栃木市とち介



栃木県誕生150年特設サイト（栃木市HP内）▶

“ある”が嬉しいゆるやか栃木市